

仙台陣屋かわら版

新春特別号

(平成二十四年二月号)

HP: <http://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/ka/jinya/> Mail: jinya@town.shiraoi.jp

〒059-0911 白老町陣屋町六八一 TEL&FAX 0144-851-2666 仙台藩白老元陣屋資料館発行

平成24年の主な資料館事業

あけましておめでとうございます。今年も町の郷土資料館たる立場を意識し、多角的に事業を実施して参りますので、よろしくお願い致します。

早速ですが、一月以降に予定している事業を簡単にお知らせします。

かねてよりかわら版等で告知しておりましたが、二月十一日(土)からは『麗しの雛人形展』を開催します。関連企画として三月三日(土)には「お雛さま会」を、また二月十一日(土)と十八日(土)にはお雛さまの「手作り体験教室」を行ないます。体験教室では予約が必要です。このかわら版が発行される頃はまだ参加者を募集中と思われるので、「興味がありましたら資料館までお問い合わせください。」

三月の中頃からは、『歴史と文化の町PR事業』の郷土資料展が始まります。昨年の夏には仙台市との歴史姉妹都市提携三十周年

を記念した特別展を行ないましたが、

この企画展では同じく三十周年を迎えたカナダのケネル市との交流の歩みを紹介致します。なかなか目に触れる



町制50周年記念に贈られた楯

機会がないかも知れませんが、これまでケネル市からは様々な記念品などが贈られています。また遠く離れた町が姉妹都市となった背景には、それぞれの町の風土も大きく関係しています。単なる都市間交流ではなく、郷土の特徴から生まれ育まれてきた歴史を紹介する予定です。詳しい日程などは来月号のかわら版でお知らせします。

変わって七月の中頃から開催となる特別展では、北海道近代史と産業の関わりに着目した展示会を企画しています。

道民の足として欠かすことのできない鉄道網、そもそもの始まりは石炭産出を目的と

していたことはご存知ですか? 明治六年、「お雇い外国人」のライマンが幌内を調査して炭鉱を発見、同年にはケブロンが幌内を輸出港として空蘭を提案し鉄道敷設に動き出します。それから十年後、北海道で初めての鉄道が、手宮と幌内を結んで開通しました。やがてこの区間は民間に払い下げとなり、北海道炭鉱鉄道として活躍していきます。またこの会社を始めとして、北海道では往時五十社もの私鉄が躍動する鉄道王国でもありました。私たちに身近なところでは、伊達紋別と倶知安町を結んでいた【胆振線】が記憶に新しいのではないのでしょうか。昭和十六年から六十一年まで操業された私鉄線でしたが、この区間への鉄道敷設は明治三十七年に函館〜小樽間路線の中間にあたる倶知安駅の開通が始まって以降から続けられていた、実に根気強い事業が結実したものでした。そして、やはり京極で産出されていた褐鉄鉱を運送するため必要とされた路線だったのです。このほか馬車鉄と呼ばれていた【登別温泉軌道】や、白老の鉱物産出に関するものなど、より細かな私鉄の資料についても紹介できればと考えています。

また詳細は未定ですが、秋口には恒例の刀剣展やアイヌ文化フェスティバルにおける展示会なども企画する予定です。いずれも改めてお知らせします。どうぞお楽しみに。

記念キップの販売を始めました

資料館ではこのたび、「Hokkaido Round Japan (ほっかいどうラウンドキップ)」を取り扱うことになりました。もとも【道の駅記念キップ】として道の駅に置かれていたアイテムなのですが、ご覧になったことはありますか？

最近では各地の博物館や資料館でも取り扱う所が増えてきています。品物は普通のキップよりやや大きめの用紙に、館の特徴を表すロゴをあしらったデザインとなっています。専用のファイルも販売していますので、これまで収集されてきた方、或いは興味を持たれた方、これを機に、お買い求めになってみてはいかがでしょうか。また陣屋資料館のキップは、資料館窓口のみ扱っています。なお、販売は資料館友の会からの委託であり、売上金は仙台藩士たちが植樹した赤松の保全基金として用いられます。コレクションするための情報(取り扱い館など)については、資料館までお問い合わせください。ちなみにたくさん集めると、さらにレアなキップも手に入るようです。



不定期シリーズ【陣屋再発見③】

幕末、蝦夷地の直轄に乗り出した幕府は、当然ながら地理情報の収集を急ぎました。蝦夷地を国外と扱っていたときのように「よく解らない地域」のままでは、そもそも警備など夢物語でしかありません。

ところで地理情報というところ、真っ先に思い浮かぶのが陸地の様子を表した地図かと思われます。もしくは夏の特別展にも展示した本州から渡るための海路図でしょうか。近世期に描かれた蝦夷地図は実に多種多様でしたが、そのなかには【沿岸浅深絵図】という図面も含まれます。その名の通り、地図でありながら情報の殆どが海に描かれ、浅深、つまり海の深さを調べ記入した資料です。十九世紀前半、幕府は二度にわたる各藩へ領内の海岸絵図の作成を命じ、後年の命令では沿岸から一定距離ごとの深さを記すよう、より実用的な図面作成が求められたようです。



陣屋資料館が収蔵する図面が昨年、『近世日本の北方図研究』という文献に所収され出

版されています。筆者は以前資料館でも講演いただいた、近世蝦夷地絵図面研究の第一人者、高木崇世芝(たかぎたかよし)氏です。読み応え・ボリューム・ついでにお値段もなかなかの文献なのですが、近世蝦夷地の絵図に関する知識を得るには、まず欠かせない一冊でしょう。

資料館所蔵の絵図は、かつて陣屋の御備頭(おそなえがしら)として赴任していた、三好監物のご子孫から寄贈された折図です。海岸からの距離はバラバラで、また蝦夷地全体の形も依然として精密とは言えません。ただこの図面は蝦夷地の広範にわたる深度が記載され、仙台藩士たちが文化年間に派遣された樺太や、安政年間に出張陣屋の設けられたクナシリ・エトロフへも及んでいます。もちろん記述の密度は東や北へ行くほど薄くなりますが、江戸幕府が把握していた蝦夷地の情報を垣間見るもの、あるいは和人にとって有用だった湊の箇所などを知る資料として捉えることも出来るのではないのでしょうか。残念ながら、誰がいつ頃この絵図を描いたのかは明らかになっていません。仙台藩士が駐屯した地域の情報が濃いわけでもありませんので、どいついつ経緯で監物が入手したのかも気になるところです。

「仙台陣屋かわら版 新春特別号平成二十四年二月号」
発行日：平成二十四年一月二十四日(火)
発行所：仙台藩白老元陣屋資料館 担当者：平野・干場